

河内八尾 1950s—1960s

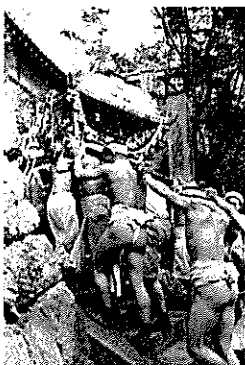


▲ 今東光が暮らした中野 (現在の西山本町)

第二回特別展示では、東光と同じく河内に魅了された写真家・田中幸太郎氏(1901-1995)の写真や、市民の方から提供された資料等を紹介しています。

田中幸太郎は、東光と出会い親しくなったことをきっかけに次第に河内に魅了され、その様子を写真作品に留めようと昭和30年(1955)から10年間ほど、丹念に撮影しました。現在ほどカメラが家庭で普及していなかった時代の写真は、貴重な資料でもあるといえましょう。これらの写真からは、当時の農作業風景や、街中での活気に満ちた様子がみえ、人々の息づかいが聞こえてきそうです。

東光も、河内・八尾の姿を文学作品に留めようとしていました。例えば、東光は小説「闘鶏」のあとがきには「(前略)純粋の河内人というものは少くなり、河内の風俗は改まり、河内の風物もまた顔(すこぶ)る変ってしまうだろうと思う。そんなことを考えだしたら、滅びゆく河内の風土記を書いておくことは必要なことだと気がついた。」と記しています。



▲ 教興寺祭り



▲ お逮夜市の賑わい



▲ 正月の子ども

東光は、「闘鶏」の執筆にあたり、全くの口伝であった闘鶏に関する用語等について丹念に調べ、100枚前後の原稿を完成するのに、実に2年余りを費やしました。東光の作品群には、河内の記録が散りばめられており、今となっては失われた習俗・人々の姿がそこには残されています。

田中幸太郎の熱意は晩年、写真集「シャモとレンコン畑」となって結実しました。そのまえがきでは、次のように記しています。

河内の国は今の淀川と大和川の川床のような土地柄から生れた国の名でお隣りの大和の国とは生駒、葛城、金剛の三山を境にして、背と腹の関係にある。愛すべき河内も、最近は日常会話も「われ」「わい」が、いつの間にか君と僕に変わっている。

私が河内風土記に手を染めたのは昭和30年(1955)河内物で一世をふうびした作家の今東光氏と誼(よしみ)を通じたに始まり土地の生活に密着するまでには相当長い日時を費やしたがケチで色を好み、軍鶏(シャモ)のように喧嘩ばやく、無軌道ながら底抜けに明るい河内人の気質には、痛めつけられながらも、ついのもり込んでいった。



▲ 恩智いちごの収穫

今東光も、田中幸太郎も、河内の出身ではありません。だからこそ、地元の人が意識しなかった、**河内の持つ魅力**にいち早く気付いたところがあるのではないのでしょうか。二人が作品に残そうとしたものを、感じ取っていただければ幸いです。

(※次回企画展示は、平成28年春に開催予定です)